

(令五文後)

小論文

- ・問題は1～8ページである。
- ・下書き用紙は中に2枚入っている。

注意 解答は答案用紙に縦書きで記入しなさい。

小論文 二〇〇点

次の文章は、岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か 第三世界フェミニズムの思想』（二〇〇〇年）の一節である（ただし、一部に変更と省略がある）。これを読んで、あとの問一〜三に答えなさい。

私、とはいかなる者なのだろうか。

何年前前に、ロバート・デ・ニーロとロビン・ウィリアムズ主演で映画化された『レナードの朝』（原題は“Awakening”『目覚め』の著者、オリバー・サックスの『妻を帽子と間違えた男』は、脳神経学者であるサックスが医師としてかかわった脳神経患者二〇数名についての短い物語を集めたものである。サックスの細やかな筆致で綴られたそれらの物語は、脳神経の障害によって生じる個別具体的な症例を通して、人間という存在とその生の奥深さに対する著者の深い洞察をにじませている。二〇数編にわたる物語のいずれもが、それぞれにたいへん興味深いものとしてあるのだが、なかでもとりわけ私に深い印象を与えたのは、「詩人レベッカ」と題された一編である。

ある日、サックスの診療所に、一人の娘が祖母に連れられてやってくる。レベッカという名の一九歳になるその娘は、ものごとの体系的理解に欠け、空間的な認識障害をもっており、周囲からは「愚鈍」「痴呆的」「のろま」と見なされる「欠陥だらけのどうしようもない存在」だった。レベッカを診察したサックスは次のように記している。

まったく不器用で不格好な彼女にはじめて会ったとき、私は彼女をただたんに、いやまったくのところ不幸な犠牲者、欠陥者だと思った。彼女の神経学的な欠陥を見つけて、正確に分析することもできた。失行症、失認症、感覚及び運動の欠損と衰弱などが認められ、知能体系と知能概念はピアジェの基準によれば八歳児なみだった。

ところが四月のある日のこと、診療所の庭を散歩していたサックスは、春の陽光を浴びて輝く、別人のようなレベッカに遭遇する。サックスは書く。

レベッカはベンチに腰かけ、四月の若葉の芽ぶきを、静かに、楽しそうにながめていた。彼女の姿には、あの見るからにひどい不器用な不格好さはみじんもなかった。薄物の服を着てすわっている彼女の顔は、おだやかで、すこし微笑んでいた。とつぜん私は、イリーナ、アーニヤ、ソーニヤ、あるいはニーナといった、チェーホフにでてくる乙女のことを思い浮かべた。背景は桜の園である。彼女は、美しい春の日を楽しんでいる乙女そのものだった。神経学者としての私の見解はどうであろうと、すくなくとも普通の人間として私はそう感じた。

近づくと、足音を聞きつけ、彼女はふり向いた。そして、満面に笑みをうかべ、ことばではなく身ぶりでこう言った。「いらんなさい、なんて美しいんでしょ」……。

桜の園の乙女レベッカ。そのときサックスは、レベッカが、「自分自身を物語的な方法でまとめることができる状態にあれば、……無傷で完全なのだ」ということに気づかされる。春の日の、この偶然的邂逅かいごによってサックスは、「精神的には充実した完全な人間」であるレベッカに出会いうのである。「出会う」ということばの、その真の意味において。

その後の診察においてレベッカは、人間性の深みを増していき、やがて、演劇のなかに自らの生きる場を見いだすことになる。『レインマン』をはじめ、機能障害をもつ人間が特異な才能に恵まれているという物語それ自体に、今ではとりたてて新鮮味があるわけではないが、しかし、周囲から「愚鈍」と見なされた「知恵遅れ」の娘が、象徴的能力を秘め、舞台でその秘められた才能を開花させるという物語は、サックスの著書に収められたほかの多くの物語と同じく、人間という存在の計りがたさ、複雑さを垣間みせてくれる。だが、私がこの物語に感動を覚えた理由は、それとはまた別のところにある。

「詩人レベッカ」は、変容の物語である。だが、それは誰の変容なのだろう。レベッカだろうか。たしかに最初、のろまな知恵遅

れとして登場した彼女は、物語の最後ではその豊かな感性を舞台で披露する一人の表現者となっている。だがレベッカの象徴的能力は、潜在的にずっと彼女のうちにあったのだとすれば、その能力が診察によって引き出され、彼女がより成長したのは事実であるにしても、彼女が根本的に別様の人間に変容したというわけではない。事実、両親に死に別れたレベッカを親代わりに慈しんで育ててきた彼女の祖母は、サックスによってレベッカの潜在的能力が「発見」されるはるか以前から、物語を愛する彼女の豊かな感性に気がついて、それを大切に育ててきたのだから。だとすれば、変容したのはレベッカ自身ではない。サックスのまなざしに映るレベッカが変わったのである。言いかえれば、レベッカを見るサックスのまなざしが変わったことであり、サックスとレベッカの関係性がある根源的な変容を被った、ということでもある。この物語はレベッカの変容の物語である以上に、著者であるサックス自身の変容の物語である。その変容を可能にしたのは、春の日の、あの偶然の出会いである。

もしかしたら「詩人レベッカ」は、とりたてて感動的な話、というわけではないかもしれない。だが、これを読んだとき、私が感動を覚えたのは、そこに、私がかここ数年来拘泥している、「他者」との出会いという問題が書き込まれていたからである。「他者」とは誰か、そして「他者」と出会うとはどういうことなのか、わずか十数頁の短い文章のなかに、桜の園のイメージに彩られながら美しく結晶した作品だったからである。

レベッカに初めて会ったとき、サックスは何者であったのだろうか。彼女をテストし分析し、失行症、失認症、感覚の欠損、八歳児なみの知能と評価をくだしたサックスとは、いったい何者であったのか。むろん、彼は医師としてそれを行なっている。もし、四月の桜のもとでのあの偶然の邂逅がなかったとしたら、レベッカは彼にとって依然として「不幸な犠牲者、欠陥者」であり続けたことだろう。そして、そうであれば、彼女が舞台で自分を存分に表現する機会もめぐってはこなかったかもしれない。では、あの春の日、レベッカに出会ったサックスは何者であったのだろうか。彼はいかなる者として、レベッカに出会ったのか。

サックス自身の言葉が示唆的である。「彼女は、美しい春の日を楽しんでいる乙女そのものだった。神経学者としての私の見解はどうかであろうと、すくなくとも普通の人間として私はそう感じた」。神経学者としての私の見解はどうかであろうと……そのとき、サックスは、専門家としてレベッカに出会ったのではない。彼が言うように、一人の普通の人間として、一人の女性に出会っ

たのである。

だが、彼は、自らの意志で「人間として」、乙女たるレベッカに会おうと思つて出会つたわけではない。桜の園で春の祝福を受ける幸せそうな娘の姿をたまたま目にするという、神の采配によるとしか言いようのない、その、あくまでも偶然の出会いが、彼を、彼の意志にかかわらず、「人間として」レベッカに会わせしめたのである(だが、「普通の人間として会おう」とは、どういうことなのだろうか?)。

この偶然の邂逅以降、サックスとレベッカの関係が、ある根源的な変容を被ることになる。それは依然として医師と患者の関係ではあるけれども、かつてのような、レベッカの能力をテストし、その欠陥を一方的にあげつらうようなものではなく、むしろ、彼女の内面に敬意を表し(それは彼女を、自分と対等な人間として、痛みや葛藤を抱えながら生きている、微妙な陰翳^{いんえい}をもつた人間として見ているということである)、その人間的成長を促すような、より対話的な関係となつていく。そして、この対話的な関係と対比したとき、四月の出会い以前のサックスとはいつたい、いかなる者であつたのだろうか。

サックスは専門医として患者であるレベッカを診察し、彼女について上述のような科学的診断を——彼女を、どうしようもない不幸な欠陥者とする裁定を——くだした。彼が医者であるということは間違いない。だが、ここで再び問うならば、それは、誰から見てそうなのか、ということだ。レベッカを救いようのない欠陥者と裁定するという彼の行為が、医者という、専門家のそれ以外の何ものでもないということが、自明かつ妥当なこととして受け入れられるとすれば、それはいつたい、誰にとつてそうであるのだろうか。少なくとも、溢^{あふ}れるような情感の豊かさを生き、適切な環境さえあれば統一のとれた人間として自己を存分に表現できるにもかかわらず、救いようのない欠陥者と診断されたレベッカにとつて、あるいは、レベッカがそうした豊かな可能性をもつた人間であることを知つている彼女の祖母にとつてではないことだけは確かである。さらに、レベッカや彼女の祖母には、医者という専門的な権威によつて一方的に彼女に貼りつけられた、この「客観的」で「科学的」な評価の、その暴力性に異議を唱えることもできない。医師の診断は、そうした一方的な裁定によつて深く傷つけられるかもしれない、そして、それに対して抗議することもあらかじめ封じられているレベッカの存在を忘却したところでなされている。

誤解のないよう急いでつけ加えれば、私は何も、四月のレベッカに会う以前のサックスが、ことさらに暴力的で抑圧的な人間であったなどと示唆したいのではない。事實はむしろ、その逆である。レベッカを救いようのない欠陥者と診断したときでさえ、サックスはおそらく誠実な医師であったのだ。だが、肝心な点は、そこにこそある。サックス自身の誠実さや意図がどうあれ、あるいは、より正確には、その誠実さにもかかわらず、彼がレベッカにとつては、彼女の豊かな人間性を社会的に抹消しようとする、実に抑圧的な暴力の行使者にほかならなかったということだ。そして、このとき、「医師である」ということは、単に、人が専門的な訓練を受け、専門的な医学的知識を有しているということではなく、そのような暴力をレベッカに対し行使しうるものが社会的に容認された存在である、ということになる。

だが、桜の園での出会いが医師を変える。彼はそこで、レベッカとはかくかくしかじかの存在であると彼が勝手に——あるいは「科学的に」——想像していたレベッカではない、彼がまったく想像だにできなかったレベッカに、すなわちまったく「他者」としてのレベッカに出会うのである。情感豊かなレベッカ、傷つくレベッカ、それは、医師である彼が、そのような存在の可能性など微塵も想像したことがなく、自分の思考の外に括りだし、何の痛痒も感じることなく忘却に付していた存在である。そして、そのような存在との出会いが逆に照射するのは、その存在を忘却しえていた彼の特権性であり、その特権の行使によって「他者」に対して自らが振るっていた、その透明な暴力の存在である。眩しい春の日を浴びたレベッカの微笑みが、この暴力を一挙に不透明なものに、私たちが躓かずにはおれないものにする。

私、とはいかなる者なのだろうか。ここでいう「私」とは、今、この文章を書くためにキーボードを叩いているこの私のことではない。それは、あらゆる名をそこに代入することのできる、人称代名詞の「私」である。

私、とはいかなる者なのだろうか。この問いによって私が——この「私」は私のことだ——問いたいののは、私の、いわゆるアイデンティティではない。私が「女」であるとか「アラブ文学研究者」であるとか、「教員」であるとか、あるいは「日本人」であるとか、そういうことではない。私が問いたいののは、そうした自己のアイデンティティというよりもむしろ、「位置」の問題により多くかか

わるものである。言いかえれば、ある特定の状況において、たとえば「私は日本人である」と発言しうる私とは、この社会のなかでいったいかなる位置にいる者であるのか、ということである。

私は日本国政府が発行するパスポートを所持しており、その意味で、私は事実、日本人である。しかし、自らの民族的出自を公然とは名乗りがたい者たちの存在を思い起こすとき、「私は日本人である」という言表は、単なる事実確定的な叙述であることをやめて、この社会のなかでそう述べることにいささかの躊躇も逡巡もなく、またいささかの勇氣も決断も必要とせず、まるで「これは本である」「これは鉛筆である」と言うのと変わらない屈託のなさでもって、そう語ることでできる私という者の特権性を示してはいないだろうか。そして、その特権性こそが、私がこの社会のなかでいかなる位置を占めているのかということをも、つまりは、そのような特権を専有する者にほかならないという事実を物語つてもいる。そして、そのような発話自体が、この社会のなかのある者たちの存在を忘却しているかぎりにおいてはじめて可能になるとするならば、そうした者たちの存在を忘却しうる私とは（忘却しうるということもまた、紛れもなく一つの特権であるだろう）いかなる者なのか。特に、その存在を忘却される者たちにとつて、いかなる者であるのか。

言うまでもないことだが、この社会のなかで、そのような特権を排他的に専有している者こそが日本人である。だから、私が日本人であるとすれば、それは単に私が日本のパスポートをもっているからでも、また、自分を日本人として自己同定しているからでもなく、自分が排他的に有するその特権性の無自覚な、ある場合には暴力的な行使という、そのふるまいによって紛れもない日本人である、ということになる。

そうであるとするなら、ナシヨナリズムに対して批判的な距離をとろうとする者がえてして口にしがちな「私は自分が日本人だなんて意識したことはない」とか、何年か前にはやった「在日日本人」というような、一見したところ日本人という民族的アイデンティティに与することを拒絶したり、また、それを相対化するような言表も、字面だけ対比すればたしかに、「私は日本人である」という民族的アイデンティティの表明と受け取れる言表と正反対のものを含意しているように見える。しかし、忘却された者たちの存在を——この社会のなかで絶えず、自分の民族的出自を暴力的に思い出させられる者たちがいることを、また、「在日」という

境遇を自らの意志とは無関係に、選択の余地なく引き受けなくてはならない者たちの存在を——想起すれば、それらもまた、特定の状況における「私は日本人である」という言表と同じく、自覚されない特権性の表明であるという点で、話者が日本人以外の何者でもないことを吐露している、そのかぎりでは、語られていることとは裏腹に、実にナシヨナリステイックな発言ということになるだろう。

存在を忘却された者たち。だが、レベツカを救いようのない欠陥人間と診断したとき、医師は彼女の存在を忘却していたわけではない。彼女は、医師の診断の対象として紛れもなく、医師の眼前に、医師の思考のなかに存在していたのだから。医師の思考から完全に忘却されていたのは、レベツカが、自分が考えているのとはまったく異なった者としてこの世界に存在しているという可能性であり、彼女の目に映る世界は、医師のそれとまったく別のありようをしているかもしれない、という可能性である。

存在を忘却された者たち。その者たちが、私が想像するのはまったく異なった状態でこの世界に存在しているというその可能性を——言いかえるなら、世界の別の可能性を——、私の思考の外部へと括り出されてしまう者たち。そのような者たちこそ「他者」、ではないだろうか。

私、とはいかなる者なのか。私が私をいかなる者として同定しているのか、ではない。私とその存在を忘れ去っている者たち、彼ら彼女らの存在を私が忘れ去っているというそのことが、しかし、私に何の痛みも与えず、私が私の思考の外部へとその存在を括り出している者たち、すなわち「他者」のまなざしのなかで、私とはいったいいかなる者であるのか。

「他者」と出会うことの原理的な困難がここにある。「他者」とは、その存在の可能性を私の思考の外部にあらかじめ排除された者たちであるがゆえに、私は、自ら意図して、彼／彼女(ら)に出会うことができない。そもそも、その原理上、私の思考の内部において、出会うべき対象としての存在を欠いた者たちが「他者」であるのだから。単に忘れていたのなら、思い出せばいい。だが、忘却しているということさえ忘却されているのが、「他者」なのだとすれば？ 「他者」との出会いを欲しながら、私の身ぶりは、私があるのかを物語っている。私には聴きとれないことばで。

「他者」との出会い、私の意図とは無関係に、つねに他者からやってくる。それはつねに、出来事として、しかも暴力的な出来事として生起せざるをえない。忘却していることも忘却しているその忘却を、そして、その忘却によって私が行使している暴力を思い出させるのだから。この暴力という点について、サククスとレベッカの物語は多くを語ってはいないように見える。桜の園での邂逅は、暴力と呼ぶにはあまりに美しく、むしろ至福に満ちた平和なイメージを喚起するかもしれない。しかし、そこには、「神経学者としての私の見解はどうであろうか」という医師自身による明確な自己否定の契機、別の言い方をすれば、^②アイデンティティが脱臼を起すモメントがはらまれていたことに注目しなければならない。そしてなお、一個の普通の人間として他者に出会う、ということの意味は、解くべき問いとして私たちの前にある。

問一 傍線部①「透明な暴力」とはということか。著者の論述に即して三〇〇字以内で説明しなさい。(配点四〇点)

問二 傍線部②「アイデンティティが脱臼を起すモメントがはらまれていた」とはということか。著者の論述に即して四〇〇字以内で説明しなさい。(配点六〇点)

問三 著者は文章の中で「私」とはいかなる者なのだろうか」という問いを幾度も発している。「私」と「他者」の関係についての著者の考えを踏まえながら、この問いに対するあなたの考えを八〇〇字以内で論じなさい。(配点一〇〇点)